

芸術科 教科主題

「芸術科」的『探究』とは

芸術作品の表現や鑑賞の活動は、感性のみをよりどころにしていると捉えられている。また、生まれながらにして備わっている能力の一部とも考えられがちである。しかし、感性は、知識・理解との連動により高まり深まっていくものである。人は音楽作品や美術作品を鑑賞して、その作品に対してまずは直感的に美しいと感じたり好き嫌いの感情を抱く。しかし、直感のみの鑑賞でとどまっている状態であれば、感性を磨くこともなく、学びや成長もない状態で終わってしまうのである。

これからの時代において芸術科が果たすべき役割は、芸術的な見方・考え方を洗練する授業を通して、生きる力としての資質・能力を育成することにある。「芸術科」的探究とは、例えば芸術作品にふれたとき、なぜ美しいと感じるのかの根拠を自らの心に問いかける過程にある。探究の手がかりは、音楽の場合では楽曲を構成する音楽的要素の働きや組み合わせであり、美術の場合では色、構図、材質などの造形要素である。それらの手がかりと直感を融合させ、知識と連動させるという探究的活動を行うことにより、より深みのある作品理解に到達することができる。それらを通して育まれる感性は、音楽では演奏や創作、美術であれば作品創作の際に幅広い発想に結びついていくものであると考える。

音楽科では、＜「比較」による音楽の探究＞という題目の授業を行う。本時では、次の3つの比較の視点に基づいて授業を展開する。比較の視点の1つ目は、同じテーマ（標題）で時代様式が異なる曲の比較、2つ目は、同じ作曲技法（カノン）で時代様式が異なる曲の比較、3つ目は、同じ作曲家の、作曲技法の異なる曲の比較である。比較によって、その曲の特徴を際立った形で感受する学習活動を繰り返すことを通して、より深い音楽の楽しみ方ができるということを体感させたい。

美術科では、最初に先輩たちの作品を鑑賞させ、それらの作品がどのような課題として制作されているか考えさせる。その趣旨を理解した上で、各個人が作者の工夫に目を向け、次に他者との交流を通して見方や感じ方を深めさせる。その後、作品制作へとすすむ。構想段階では他者との交流も行うが、まずは自問自答しながら構想を練ることに重点を置く。